2020年9月20日 佐土原キリスト教会 礼拝説教
聖書箇所：ヨハネ福音書12章1～11節
説教題：主を愛する

「百万人の福音」8 月号に「ベサニー・ハミルトン」という人の証がありました。「ソウル・サーファー」と呼ばれている人です。彼女は、サーフィンの練習中に、サメに襲われ、左腕を食いちぎられ、生死の境をさまよい、一命は取り留めるのですが、本当に大変なところを通りました。それでも、事故から一か月後には、またサーフィンのトレーニングを始め、右腕一本で、全国タイトルを獲得するのです。その彼女が一番辛い時に、彼女を支えた聖書の言葉がありました。彼女はこう言っています。「それはエレミヤ書の『わたしは、おまえたちのために立てている計画をよく知っている。それは災いではなく祝福を与える計画で、バラ色の将来と希望を約束する』(29:11)でした。神様は私を愛し、人生に計画をもっていてくださる。納得がいかないことが起きても、すべては神様の計画の中にあり、悪からでさえ善を生み出してくださるということを信じたのです」(ベサニー・ハミルトン)。「悪からでさえ善を生み出して下さる」、この言葉は素晴らしいと思います。彼女は、何があっても主の愛に信頼する、そのことによって、主を愛するという道を生きて行ったのです。

今日の聖書箇所の背景になっているのは、「過越の祭り」です。この時から 1300～1400 年ほど前、イスラエルの人々が、エジプトから脱出することになった時、神様は指導者モーセを通して、イスラエルの人々は皆、子羊を屠って、家の門柱と鴨居に子羊の血を塗っておくように、命じられました。夜になって「死の天使」がやって来て家々の長子を撃った時、「死の天使」は、羊の血が塗ってある家は過ぎこしたのです。羊の血が神の民を死から守ったのです。その混乱の中で、神の民イスラエルはエジプト脱出に成功したという、その出来事を記念して祝うのが「過越の祭り」でした。その「過越の祭り」の時に、イエス様は、全ての人を滅びから守る子羊として十字架に架かろうとしておられました。その 6 日前です、マリヤがイエス様にナルドの香油を注いだという有名な記事を記すのが今日の聖書箇所です。今朝は、この個所を通して「主を愛する」というテーマで、信仰の学びをします。「内容」と「適用」に分けてお話しします。

1：内容～マリヤはその信仰によって主を愛した

イエス様は、ベタニヤでラザロをよみがえらせた後、ベタニヤから少し離れたエフライムという所に身を隠しておられましたが、いよいよ最後の「過越の祭り」を迎えるためにエルサレムに上ろうとされます。「過越の祭り」の時、近郊のベタニヤも巡礼客の宿泊所として用いられました。イエス様もベタニヤに留まられました。イエス様がベタニヤに帰って来られた時、人々は、つい先日、イエス様がラザロをよみがえらせた出来事を鮮明に思い出したことでしょう。人々は、イエス様のために晩餐を開きます。

10～11 節に「祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。それは、彼のために多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになったからである」(10～11)とあります。イエス様がラザロをよみがえらせたことで、権力者達はイエス様を殺すことを正式に決めました。権力者が一番恐れたのは、民衆が暴動を起こすことです。もし暴動が起きれば、ローマの軍隊が鎮圧に乗り出し、権力者は、与えられている自治権を奪われるかも知れません。ラザロをよみがえらせるという奇跡を行ったイエス様を、人々がメシア(救い主)だと信じるようになっている、民衆が反ローマの指導者としてイエスを担ぎ出すかも知れない。だから本気で殺そうとしていました。それだけでなく、イエスの奇跡の証人であるラザロも殺そうとしていました。イエス様を取り巻く状況

というのは、そのように緊迫していました。

しかし、ここに権力者達とは全く違う形でイエスの死に備えをする女性が登場します。マリヤです。イエスと弟子達は、ベタニヤのある家に入られました。マルタ、マリヤ、ラザロの家だったかも知れません。イエスがその家で食事をしておられた時、マリヤが高価なナルドの香油の入った壷を持って来て、その香油をイエス様の足に注ぎかけ、そして髪の毛で拭ったのです。問題は、なぜ彼女がこのようなことをしたのか、ということです。ユダは「なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか」(5)と言います。「なんでこんなむだなことをするのか」ということです。ナルドの香油というのは、インドから輸入されていた高価な香油のようです。通常、頭に塗ったり、また死体に塗ったりしたそうですが、それでも、壷に入っているものを全部注ぎかけるようなことはしないのです。300 デナリ分の香油です。当時の労働者の 1 年分の賃金にあたる額の香油です。それを注いでしまったのです。しかもユダヤの女性が何より大切にしていた髪の毛でそれを拭いました。ある説教者は、この場面を表現して「異様なことが起きた」と言っています。なぜ彼女は、こんなことをしたのでしょうか。

ユダには—(ユダだけでなく弟子達には)—彼女のしたことが理解できませんでした。だから彼女を責めました。彼らの言う「この香油なら、高く売れて、貧しい人達に施しができた」、それは確かに正論かも知れません。そういう使い方もあるでしょう。特に「過越の祭り」の時は、貧しい人への施しが奨励されました。またその方が、イエスが教えて来られた「隣人への愛」の教えに適っているかも知れない。しかしイエス様は、弟子達とは違う反応をされます。イエス様は言われました。「そのままにしておきなさい。マリヤはわたしの葬りの日のために、それを取っておこうとしていたのです」(7)。イエス様は何を言っておられるのでしょうか。「メッセージ訳」という英語の聖書はこう訳します。「彼女は、私の葬りの日を予期して、栄誉を与えてくれているのです」(メッセージ 7)。イエスは「過越の祭り」の時に死のうとしておられるのです。「女がしたことを『異様な出来事だ』と言った説教者がいた」と申し上げましたが、それ以上に異様なのが、イエス様が死のうとしておられることです。しかし、「出エジプト」の時、「過越し」のために屠られた羊の血がイスラエルの人々を死の使いから救ったように、イエス様は「死の力」から人々を守るために、ご自分が子羊として血を流そうとしておられたのです。イエスの十字架によって、十字架の贖いを信じる者は、死の力がその人のところを過ぎ越すのです。「出エジプト」の子羊の砦に勝る、永遠の砦がここに造られるのです。

しかしイエス様の死の時、一体誰がそのことに感謝したでしょうか。弟子達でさえ、イエス様に香油が注がれたことを「無駄遣いだ」と言ったのです。私は、弟子達が後に「十字架と復活」の証人となった時、自分達はイエス様の死の犠牲に応えることが何も出来なかった、そのことを情けなく思ったと思います。でもマリヤは、イエス様の死に感謝するかのように、あるいは昔から神の特別の働きをする人に香油が注がれた、そのように香油を注いでくれた、弟子達はそのことをどんなに救われた思いで思い出しただろうか、語っただろうか、と思います。いずれにしても、イエス様は、彼女が時宜に適ったことをしてくれたことを喜ばれたのです。「マルコ福音書」には「この人はできるかぎりのことをした」(マルコ 14:8)というイエス様の言葉があります。確かに 1 年分の生活費を一瞬で使い果たしてしまうことは浪費かも知れません。でもイエス様は、彼女のためにも命を捨てようとしておられました。彼女は、それに応えようとするなら、こうせざるを得なかった、これが彼女に出来る精一杯のことだったのです。ある神学者はこう言います。「十字架を前にしてイエスが真に出会ったのは、2 人の女性だけだった」。1 人は神殿に 2 レプタを捧げた女性です。そのお金は彼女の生活費の全てでした。生活費の全部を神様に捧げてしまっ

たこの女を見て、イエス様はどれだけ励まされたことでしょう。そしてもう１人が、この「出来る限りのことをしたマリヤ」です。この２人だけは、本当の意味で、十字架に向かうイエス様を励ましたのです。

最初の質問に帰りましょう。彼女はなぜこんなことをしたのか。はっきりとは分かりません。直接的には、彼女は、イエス様が兄弟のラザロをよみがえらせて下さったことが、いくら感謝しても、し尽せないくらい、有り難かったのではないかと思います。もう会えない、もう話すことも出来ないと思っていた大切な兄弟を、イエス様は彼女に返して下さったのです。しかし、それだけではなく、マリヤはいつも熱心にイエス様の話に聞き入っていた人です。その信仰によって、イエス様が死のうとしておられることを、しかも人を愛するために、彼女を愛するために、死のうとしておられることが分った、感じたのではないでしょうか。宗教改革者カルバンは言っています。「彼女は聖霊の息吹に導かれて、キリストへの義務を果たさないわけにはいかなくなった」。彼女も、なんで自分がこんなことをしたのか、はっきり分らなかったかも知れません。しかし、イエス様が自分達を愛するために死のうとしておられる、それを感じた時、聖霊に押し出されるように、そのイエス様の愛に応えようとした、応えざるを得なくなったのではないでしょうか。そして彼女は、持っている香油を全部注ぐという仕方で、精一杯イエス様を愛そうとしたのです。イエス様の愛に応えようとしたのです。それがこの行為だったのです。そしてイエス様は、彼女の思いを知って、その愛を、愛の奉仕を、喜んで受け止められたのです。

２：メッセージ～私達の信仰も主を愛する信仰でありたい

この個所は私達に何を語るのでしょうか。こんな話があります。ジョン・ウェスレーという英国の有名な説教者、神学者がいます。彼は、英国国教会に対抗してメソジスト教会を創りました。彼がある日、夢を見ました。彼は天国の門の所にいました。そして門番の天使に尋ねるのです。「天国には英国国教会の信者はいますか」。天使は「いいえ」と答えます。彼は「やっぱり」と思います。「では(私の教派)メソジストの信者はいますか」。天使は答えます。「いいえ」。彼はショックを受けるのです。真っ青になっている彼に、天使は言います。「私は、ここに来た人々が、どこの教派に属していたかなど全く知りません。なぜなら天国では教派を問題としないからです」。ウェスレーは聞きます。「そうすると、ここに入れて頂ける人は、どのような人達なのでしょうか」。天使は言いました。「ただ一つ、主を心から愛している人々です」。この個所が私達にチャレンジすることは「あなたはイエス様を愛していますか」ということです。ある牧師がこう言いました。「信仰生活は、なりふり構っていられないものです。マリヤのように、はたの人の思惑などは、全然問題にしないものであると思います。『信仰はあまり熱狂的にならない方がいい』と分別くさいことを言う人がいます。しかし、信仰はただ神のことだけを考える生活です。それならば、時としては、人の目に愚かしいと思われることもあるに違いありません…信仰とは分別を忘れるほどに、人間としてもまことに愚かだとしか思われないようなこともするのです。それほど激しく燃えるものなのです」。もちろん信仰には、「世的な常識」も必要です。世の常識が通用しない世界であってはいけないと思います。しかしまた「信仰の世界」は、「世の常識」だけでもいけないのだと思います。だいたい「愛」ということであれば、計算では割り切れないでしょう。親が子を愛する愛もそうです。計算尽くではありません。親は、計算を土返ししたこともするのです。逆に、計算尽くのものであれば、それは「愛」とは言わないのではないでしょうか。イエス様は、計算尽くでない愛で私達を愛して下さいました。ヨハネは言いました。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物として

の御子を遣わされました。ここに愛があるのです」(1 ヨハネ 4:10)。パウロは言いました。「十字架のことばは…愚かであ(る)」(1 コリント 1:18)。イエス様も、私達を愛するために愚かになって下さいました。私達はどのような仕方でイエス様を愛しているでしょうか。私達も、主の愛に感謝する時、主に対する愛を愚かなくらいに注ぎ出すことがあって良いのではないでしょうか。

具体的にどういうことでしょうか。「ヨハネ福音書 14 章 23 節」に「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります」(ヨハネ 14:23)とありますから、それは「愚かと思われるくらい御言葉に従う」という形を取るかも知れません。主に仕えようとして、誰かに、何かに仕えて行く(奉仕する)ことかも知れません。色々な仕方があるのでしょう。そして実は、弟子達は「イエス様に愛を注ぐよりも、貧しい人に施せ」と言いましたが、イエス様を愛するということは、隣人を愛することと相反することではないのです。マザー・テレサは、インドのコルカタで貧しい人々を愛し、彼らがせめて人の愛に包まれて死んで行けるようにと奉仕を続けました。でも彼女は言いました。「私は社会福祉のためにやっているのではありません。キリストに仕えようとしているのです」。彼女は、主を愛そうとしたのです。それが彼女にとっては、貧しい人に仕えることだったのです。カナダでお会いしたご高齢の兄弟が良く言っておられた言葉があります。それは「私は神に愛された。その愛された愛で誰かを愛し返す、それが私の信仰です」という言葉です。この方は、仕事の中で追い詰められたような状況に置かれた時に、ある本を通して「一遍キリスト教を試して見なさい」という言葉に出会って教会に導かれたのです。そこから人生が変えられ、色々な恵みを経験されたのです。「愛をもらった」と表現されました。それで「キリストの愛に対して、人を愛することで応えたいのだ、それが私の信仰の在り方なのだ」と、そう言われたのです。言葉を換えると「誰かを愛すことで主を愛そうとされた」ということでしょう。あるいは最初にご紹介したベサニー・ハミルトンは、神の愛を証しすることで、神を愛そうとしました。彼女は言います。「神様は、事故を通し、私に忍耐力と力、そしてサーフィンに対する新たな情熱を与えてくれました。事故直後、1 人の救急隊員にかけられた忘れられない言葉があります。彼は意識が薄れていく私の耳元で『神様は、決して君を見放したり、見捨てたりしないよ』とささやいたのです。それは本当でした」。また、こんなことも言います。「私の人生には多くのチャレンジが投げかけられました。でも、立ち止まることなく進み続け、自分で想像した以上の多くのことができました。立ち止まらなかったのは、私が完璧だったからではありません。私の強さ、土台、アイデンティティーは、神様が私に与えて下さった信仰にあります。信仰を働かせ、神の真理に根ざして生きようとする時、人生でどんな大きな波や難しいチャレンジが襲って来ても、共にいて下さる神様が味方となり、乗り越える力を与えて下さるのです。だから私は立ち止まらない。神様によって、立ち止まらないのです。そしてあなたにも、神様は同じことを望んでおられます」。彼女は、証しを通して、私達の信仰を励まします。それが彼女の、主を愛する愛し方なのだと思います。色々な形があって良いでしょう。

いずれにしても、マリヤは、出来ることで精一杯、イエス様を愛しました。私達の信仰生活にも、「主を愛する」という視点が必要ではないでしょうか。それは滅私奉公のようなことではありません。聖書は言います。「神を愛する人々…のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)。それは結局、私達の信仰生活が豊かに祝福されることに繋がって行くのです。信仰生活に「主への愛、主を愛する」という要素を育てて行きたいと思います。そのような信仰に生きて行けるように祈り求めて行きたいと思うことです。